

目指す学校像	「笑顔輝く 楽しい学校」 ～ 「凡事徹底」 + 3つのC (Challenge・Chance・Change) = 楽校 ～
--------	---

重点目標	1 主体的・対話的で深い学びの実現 2 豊かな心の推進と安心・安全な教育環境の整備 3 コミュニティ・スクールによる連携・協働 4 「凡事徹底」、3Cを合言葉に協働共励の組織づくり
------	---

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

年度		学校自己評価			年度評価		学校運営協議会による評価	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	
1	〈現状〉 ○全国学力・学習状況調査では、国語、算数ともに全国、市平均と比べ概ね良好な結果である。また、国語の記述式において、前年度と比較して、記述式の無回答率が下がり、改善傾向が見られた。 ○市の学習状況調査では、学びに向かう力の項目に肯定的な回答をした児童の割合は、市平均と比べ算数・理科で高く、国語・社会で低い学年がある。 ○コンピュータを活用して、学習内容の理解度や興味・関心に合わせて学習することに意欲的に取り組む児童が多い。 〈課題〉 ○どの学級にも、集団での学習に困難さを抱えていたり、学びに向かう力に課題があったりする児童が見られる。 ○獲得した知識や技能を活用して、問題を解決しようとする力に課題のある児童が見られる。 ○市の学習状況調査では、国語の「読むこと」の領域において市平均を下回っている学年がある。	・主体的・対話的で深い学びの実現 「学力向上に関する取組」	①児童が考えを友達と共有しながら、自身の思考を深めることができるように、全教員が「学びのポイント」(じしゃく)を活用した授業を展開する。 ②学習の面白さ、達成感、学習したことと生活の結びつきを感じることができるよう、探究的な学び、個別最適な学び、協働的な学びの充実を図る。 ③きめ細やかな指導の充実を図るために、5・6年生の教科担任制と3・4年生の学年内交換授業を展開する。 ④児童が新たな学びにつなげることができるよう、授業の最後に、自らの学びを振り返る時間を設定する。 ⑤「読むこと」について、学習の展開の中で、読む視点を絞って読み取る学習を行う。	①②学校自己評価に係る児童・教員アンケートにおいて、「自ら学び考えるなど進んで学習に取り組む」「探究的な学びに向けた授業の工夫」の肯定的な回答の割合が90%以上となったか。 ③学校自己評価に係る児童・保護者アンケートにおいて、「分かりやすく教えてくれる」「分かりやすいよう工夫して指導」の肯定的な回答の割合が90%以上となったか。 ④学習のめあてや振り返りの記入できる学習の手引き的なカードやノートなどに学習の振り返りを書くなど、児童が、自分の学びを振り返り、次の学びにつなげているか。 ⑤読解力に関する問題において、正答率を1学期当初と比べ、向上させることができたか。	①②探究的な学び、個別最適な学び、協働的な学びを充実させ、子どもたちに学習の面白さ、達成感を味わわせることが概ねできた。○児童・教員アンケート「自ら学び、考えるなど進んで学習に取り組む」児童84%「探究的な学びに向けた授業の工夫」教員100% ③教科担任制、学年内交換授業を実施○児童・保護者アンケート「分かりやすく教えてくれる」児童95%「分かりやすいよう工夫して指導」保護者98% ④単元計画、学習のめあて、振り返りの記入できる学習の手引き的なカードを活用した授業実践や学習の振り返りをノートに書く取組などにより、ほとんどの児童が自分の学びを振り返ることができている。 ⑤読む視点を絞った学習の展開は概ねできている。読解力に関する問題の正答率については、概ね良好である。	B	○個別最適な学びについては、低学年でも取り組めるように、まずは学習形態の選択から取り組んだ。その結果、子どもたちの学びがより主体的なものへと変容した。 ○教員の取組に差がある。それを踏まえながら、次年度は、学ぶ場所、学びのツール、学びのペースの選択にも取り組んでいきたい。 ○協働的な学びについては、ICTを活用しながら、他者の学びや考えを共有することができ、子どもたちの充実感にもつながっていた。次年度も継続していきたい。 ○教科担任制が機能し、教員の指導力向上につながっている。令和8年度に向けて、4年生まで拡大していけるかどうか検討していく。	○教員アンケート「探究的な学びに向けた授業の工夫」において、「そう思う」と答えた教員が児童と比べ低いのは、教員が現状に満足せず、よりよい授業改善を目指していることの本音だと思う。今後も高い意識をもって取り組んでほしい。 ○評価シートから、先生の日頃からの御苦労と努力が伺える。
2	〈現状〉 ○全国学力・学習状況調査において、「学校に行くのが楽しい」「人が困っているときには、進んで助けている」の質問に肯定的な回答をした児童の割合は、全国平均を上回っている。 ○上級生が下級生を気にかけていたりするなど、学年を超えて仲よくできる児童が多い。 〈課題〉 ○学校自己評価に係る児童アンケートにおいて「悩みや困ったことが起きた時、誰かに相談できる」の質問に否定的な回答の割合が、他の項目と比べ高く、多面的な児童理解と適切な支援を行う必要がある。 ○市の学習状況調査では、「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」の質問において、肯定的な回答をした児童の割合が市の平均を下回る学年があった。 ○廊下歩行に課題がある。	・豊かな心の教育の推進 「安心・安全に関する取組」 ・安心・安全な教育環境の整備 「安心・安全に関する取組」	①代表委員会を中心とした「あいさつ運動」と豊かな仲間意識を育むための、異学年集団による交流活動「ハッピータイム」を展開する。 ②子どもたちの自発的な気付きや行動を促すために、子どもたちとの対話を大切にしたコーチングの手法による教育実践を行う。	①学校自己評価に係る児童・保護者アンケートにおいて、「あいさつ」「友達と仲よく生活」の項目の肯定的な回答の割合が90%以上となったか。 ②学校自己評価に係る児童・保護者アンケートにおいて、「よさを見つけ認め伸ばす指導」の項目の肯定的な回答の割合が90%以上となったか。	①あいさつ運動、ハッピータイムの取組はより充実している。○児童・保護者アンケート「あいさつ」児童90%保護者86%「友達と仲よく生活」児童96%保護者96% ②校長から教職員に様々な機会を通じて、コーチングについて話をした。約6割程度達成○児童・保護者アンケート「よさを見つけ認め伸ばす指導」児童92%保護者97%	B	○あいさつ運動は子どもたちが飽きないように工夫できている。 ○コーチングについては、話の聞き手である教職員が、「子どもたちの考えを上手に引き出せない」といった課題がある。子どもたちと一緒に考えるのがコーチングの姿勢であることと今後教職員に伝えていく。	○授業規律と多様性は、相反するもので両立は難しいが、授業規律の確保は大切である。その際に、先生がこの約束がなぜ必要なのか子どもたちに分かりやすくその意義について説明することが大切である。対話を通して、子どもたちにとって、「守っていた方がいいよね」となるようにしてほしい。 ○学校経営方針の「価値観をとものにできる」という部分はぜひ子どもたちに寄り添ったものとなるようにしてほしい。 ○今後、教師の対応力が一層求められる。
3	〈現状〉 ○学校運営協議会で、子どもたちのコミュニケーションにおける課題について、3者で共有を図った。また、学校運営協議会を主体とした「あいさつ運動」が家庭・地域でも定着してきている。 ○教育活動を、積極的に保護者に公開したり、学校だけでなくで本校の取組についての情報発信を行ったりできている。 ○子どもたちのコミュニケーション力向上に向けた具体的な取組を推進する必要がある。 ○コミュニケーション力以外の子どもたち、学校における課題の共有を図っていく必要がある。	・コミュニティ・スクールによる連携・協働体制の構築 「開かれた学校づくりに関する取組」	①学校運営協議会の情報を学校だよりや学校HPで積極的に発信し、取組等を広く、家庭・地域と共有する。 ②コミュニティ・スクールを核として、子どもたちのコミュニケーション力向上に係る取組を展開する。 ③学校運営協議会で、「学力向上」「体力向上」「自主性」など、コミュニケーション力以外の子どもたち、学校における課題について、幅広く熟議を行う。 ④小中一貫教育の取組、保幼小連携の取組を展開する。	①学校自己評価に係る保護者・教職員アンケートで、「学校運営に関して、学校・保護者・地域が連携・協働して、子どもたち成長を支えている」と回答する割合が90%以上となったか。 ②子どもたちのコミュニケーション力向上に係る取組を実施できたか。 ③コミュニケーション力以外の課題について熟議を行い、共有できたか。 ④「小1プロブレム」「中1ギャップ」の解消に向けた、保幼小連携及び小・中一貫教育の取組を充実させることができたか。	①②学校だよりや懇談会校長挨拶において、保護者、地域へ対話力の重要性和普段のコミュニケーションで大切なことについての啓発を行った。○保護者・教職員アンケート「学校運営に関して、学校・保護者・地域が連携・協働して、子どもたち成長を支えている」保護者98%教員100% ③コミュニケーション力の課題を深く掘り下げ、対話力について熟議を行った。 ④新規に小中合同挨拶運動を実施。また、保幼小連携「架け橋期のカリキュラム」を新規に作成し、それに基づいて保幼小交流会を実施した。	B	○子どもたちの対話力向上には、教職員、保護者と子どもたちとの双方向の対話力を高めることが重要であることを3者で共有することができた。今後、対話力の向上に向けた具体的な取組について検討していく。 ○小・中一貫教育の取組については、夏季休業中の3校合同研修会において、研究協議のテーマ選定を工夫し、昨年度と比べ協議が深まり、それぞれの実態を把握することができた。次年度は、把握した実態をもとにして取組を一層充実させていく。	○中学校区の学校間の行事の調整について、教務主任の負担が大きい。4校連絡協議会を活用するなど、管理職同士のコミュニケーションをとりながら連携を図るとよい。 ○児童が、様々な大人と話す機会があると、子どもの対話力が高まるのではないかと。 ○学校がやろうとしていることの意図や思いが一部の保護者に共有されていない。PTAとしても協力していきたい。
4	〈現状〉 ○エバンジェリストが中心となりICTの効果的な活用についての研修を実施し、日常的に授業で活用できる教職員が増えた。 ○市の職場環境についての意識調査では、「職場で教職員が協働し合う体制が整っていると感じていますか」の質問において、肯定的な回答の割合が100%だった。 〈課題〉 ○研修を通して、「自律的に学び続ける力」「新たな課題に対応できる力」「協働的に課題解決できる力」を育成し、教職員の資質向上につなげる必要がある。	・「凡事徹底」を合言葉に協働共励の組織づくり 「教職員の資質向上に関する取組」	①個別最適な学びと協働的な学びの授業の在り方について、外部講師を招聘した研修の実施と研究を推進する。 ②少人数グループ内で授業を見合いながら、授業改善を行う。 ③低中高学年ブロック・本部に1人ずつエバンジェリストを配置し、エバンジェリストからの個別最適な学びにおける各教員への課題提示と各教員の授業実践を行う。 ④協働体制を強化するために、教科担任制、各ブロック学年の副担任制による教職員の情報共有を活性化させる。	①②少人数グループの授業実践を各教員が年2回実施したか。また、学校課題研修を通じて、少人数グループの取組の共有を学期1回、個別最適な学びと協働的な学びの授業スタイルを1月末までに確立できたか。 ③学校自己評価に係る教員アンケートにおいて、「ICT機器の活用を意識した授業を行っている」の肯定的な回答の割合が90%以上となったか。 ④市の職場環境についての意識調査において、「協働体制」の項目の肯定的な回答の割合が95%以上だったか。	①②外部講師を招聘した研修を実施し、個別最適な学びと協働的な学びについて理解を深め、各教員が、少人数グループの授業実践を年2回実施した。各グループの取組について全体で情報共有を行い、その後の授業改善につなげていた。 ③エバンジェリストの情報提供を参考にしながら授業実践を行った。○「ICT機器の活用を意識した授業」教員100% ④教科担任制、副担任制による教職員の情報共有を綿密に行い、協働的に課題解決ができていた。市の職場環境についての意識調査において、「協働体制」教職員91%	A	○研修の在り方を見直し、教員の主体性を重視した研修を実施した。それにより、教職員に「自律的に学び続ける力」「新たな課題に対応できる力」「協働的に課題解決できる力」の3つの力が高まって、資質向上につながっている。次年度も継続していきたい。 ○児童のタブレット端末の使い方に課題が見られる。次年度は、タブレット端末を正しく使えるように、ICTリテラシー教育に力を入れる。	○善悪の判断力がまだできていない小学生が、タブレットを正しく使えるか心配である。検索の制限など、何か物理的な遮断ができる仕組みやルール作りが必要ではないか。 ○家庭で、インターネットの情報に触れる機会に差がある。そういう意味では、学校における情報モラル教育は極めて重要な取組である。子どもたちには、正しくタブレットを使ってほしい。